



津西幼稚園

Mie

三重県津市河辺町2273-8

安心は、子どもを伸ばす土台になる

三重県津市。駅前の賑わいから車で15分ほど離れた丘の上に、津西幼稚園はある。道を登りきった先に広がるのは、3千坪を超える広い園庭と、その奥に続く里山「ぼくらのお山」。子どもたちは木陰を歩き、どんぐりを拾い、アップダウンのある山道を走り回る。虫取りに夢中の子の周りには、自然と同じ興味を持つ仲間が集まり、「ダンゴムシの女の子見つけたよ」などと子ども同士で語り合う。ここでは自然が日常であり、遊びの舞台であり、学びそのものでもある。

津西幼稚園は昭和55年、駅前にあった大川幼稚園とは異なる環境を求めて開園された。子どもが季節を感じながら自由に遊べる場所が減っていく中で、豊かな自然を体いっぱい感じて遊び、体験していくことで、「知性や感性、たくましい心を身につけてほしい」という願いから生まれた園である。

現在園長を務める三井先生は、幼い頃から教師への憧れもあり、大学では音楽を専攻。小学校教員を志した時期もあったというが、偶然アルバイトで入った大川幼稚園で幼児教育の面白さに惹かれた。やがて正規職員となり、20年以上の勤務期間の中で大川幼稚園の園長も務め、令和2年に津西幼稚園へ異動している。

その頃は新型コロナウイルスが広がり始めた時期でもあった。マスク越しの保護者、分散行事、黙食。例年通りができない中でのスタートに不安もあったという。

「子どもも保護者の方も不安、先生も不安、私も不安。だから一つずつ考え直すしかありませんでした」。



休園中には動画配信や手遊びの録画を行い、子どもたちとのつながりを守ろうとした。三井園長は当時をこう振り返る。

「一人では乗り越えられませんでした。子どもたちや保護者の方々、先生たちがいてくれたから乗り越えられたんです」。

この経験は、園をチームとしてまとめる転機にもなった。

三井園長が保育で最も大切にしているのは、「安心できる環境づくり」だ。子どもには得意不得意がある。無理に活動させても力にはならず、むしろ心を閉ざすこともあるだろう。

「やってみたいと思えるタイミングを待つことが大事です」。

三井園長は教職員に子どもの小さなつぶやきや行動を見逃さないよう求め、毎日子どもの姿を記録してもらう。良い姿には二重丸、心配な姿には三角、面白いつぶやきにはハート。優しさや思いやりを意識的に拾い上げ、保護者にも伝えていく。

さらに園では、子どもが自分の気づきや思いを言葉や表現で伝える時間を大切にしている。遊びの中でも対話が自然に生まれるよう声をかけ、製作活動では自分のアイデアを形にできる教材を用意する。言葉や表現の力は、これから社会を生きる基礎になると考えているからだ。

また、幼児教育は子どもだけを見ていては成立しない。保護者との信頼関係があって初めて成り立つものだ。特に入園当初、泣く子を送り出す保護者は不安を抱えており、その不安が解消されなければ子どもも安心して生活できないだろう。

「お母さんが穏やかでいられることが、子どもの安心にもつながる」と三井園長は言う。



担任だけでなく全職員で家庭の状況や気持ちの変化を共有し、誰が関わっても同じ方向で支える体制を整えている。

ある年、入園当初は泣いて輪に入れなかった子がいた。運動会の練習でも遠くから見ていることからスタートした。しかし3年後、発表会では堂々と役を務め、仲間をリードする存在へと変わった。

「こんなに変わるんだと私たちも驚きました」。
子どもは自ら成長する力を持っている。その力を発揮するために必要なのが、安心できる土台なのだと改めて感じたという。

三井園長は、幼稚園を「好き」を見つける場所にしたいと語る。好きな時間、好きな友だち、好きな先生。そうした記憶が成長したあとも心を支えると信じているからだ。

実際、卒園児が先生として戻ってきたり、大学で幼児教育を学ぶ学生として再会したりすることもある。小学校卒業の日に、自然と幼稚園時代の仲間が集まり記念写真を撮っていたという話を聞くこともある。園で過ごした時間が、心に温かく残っている証だろう。

「津西幼稚園は、あたたかくて安心できる場所だったと思い返してもらえたら嬉しいですね」。

津西幼稚園が育てているのは能力ではない。安心の記憶だ。
自然の中で遊び、仲間と笑い、支えられた経験。その小さな記憶は、やがて人生のどこかで、それぞれの心を力強く支え、「生き抜く力」となっていくはずだ。